

簡易宿泊所転用型アパートにおける生活実態と交流に関する研究

正会員 中村和晶*
 同 横山俊祐**
 同 徳尾野徹***

寄せ場 サポートタイプハウス 転用型アパート
 単身高齢者 自立 地域交流

1. はじめに

大阪市あいりん地区は日本最大の寄せ場として、どやと呼ばれる多くの簡易宿泊所が誕生した。高齢化、福祉需要の高まりといった時代の変化、居住者のニーズの変化に応えながら、その多くがアパートへと経営転換している。その中でも、図1のように談話室やスロープ、手すりなどを備えたハードの充実と生活相談や金銭・投棄管理などのソフトの支援により生活の質の改善を目的としたサポートタイプハウス(以降、SH)が増加している。あいりん地区と居住空間における研究には、社会福祉や権利の視点のものが多く、単身高齢者の人付き合いや社会参加から見た転用型アパートのハードとソフトの関係性や有用性に関するものは見られない。

本研究では、SHを含む転用型アパートの運営と地域との連携の実態、居住者のアパートに対する評価及び生活実態を把握することで、転用型アパートの空間的特性とその影響による生活展開及び交流展開の可能性を考察した。それにより、単身高齢者の自立生活を可能とする空間的条件、地域環境のあり方を検討する。

2. 調査概要

サポートタイプハウス(Is, Hi, Wo)に対してスタッフにヒアリングを行い、運営と支援について把握した。また、アパート6軒(Is, Hi, Wo, Wm, Sy, Os)の居住者に対してアパート内空間に対する利用と評価に関するアンケート調査を行い、了解の得られた居住者に対して、より具体的な暮らしと交流の実態についてヒアリング調査を行った。

3. 施設概要および運営実態(表1)

台所・トイレは各階共同、浴場・洗濯場は1階に配置されている。下足は建物エントランスで上足は履き替え、上足は各居室で脱ぐ仕組みとなっている。SHであるIs, Hi, Woではサポートタイプハウス連絡協議会の規定によって1階に居室3室を改修して1室とした談話室が設置され、スタッフ数は居住者15人に対して1人が目安である。100室前後の規模の建物が多く、居室広さは3帖+板の間が基本である。

4. 空間に対する利用と評価(図3)

【台所】弁当購入があるWo, Hi, Isでは利用率が低く、朝だけ自炊するなどの使い分けのケースがみられた。頻繁な利用層には「ガス水道代がかからない」「掃除をしなくてすむ」といった経済性や合理性を重視する意見と同時に、「自分の部屋で使いたい」などの、「接する場」というよりも「生活の場」として利便性を重視する傾向がみられた。

【浴場】「毎日1回」の層では「接する場」としての意識が見られたが、「週1回」などの消極的な利用層には「使

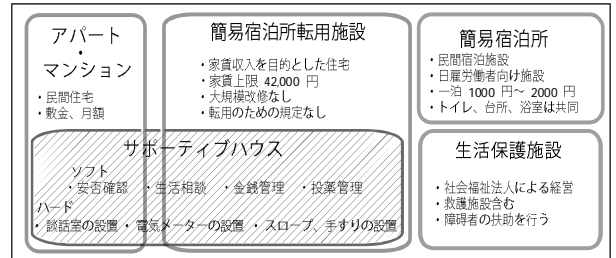


図1 居住施設位置づけ

表1 ヒアリング対象アパートの施設概要

施設名	サポートタイプハウス					転用型福祉アパート	
	Is	Wo	Hi	Wm	Sy	Os	
開設時期	1987-1988年	1988年	1970年頃建替	不明	1986年12月	不明	
以前の建物形態	簡易宿泊所					簡易宿泊所	
業態変更時期	2002年2月	2000年12月	2000年11月	2010年	2001年6月	不明	
階数	6F	6F	6F	5F	8F	7F	
居室の広さ	3帖・4.5帖	3帖・4帖	3帖	3帖	3帖・3.5帖	3帖	
談話室	有					無	
スタッフ数	スタッフ25人	スタッフ4人	スタッフ24~5人		スタッフ2人		
サポート	金銭・医薬品管理 モーニング喫茶					-	-
家賃	¥42,000~	¥42,000	¥42,000	¥42,000	¥42,000	¥42,000	
共有・電気別	共有・電気別	共有・電気別	共有・電気別	共有・電気別	共有別	共用別	
室数	102室	96室	90から100室		98室	不明	
改修	談話室設置					新規入居内装替	
	玄関スロープ・手すり・電気メーターの設置					不明	

表2 アンケート回収率

施設名	Is	Wo	Hi	Wm	Sy	Os
配布数	20	30	20	12	30	15
回収数	12	14	10	5	7	7
回収率	60%	47%	50%	42%	23%	47%

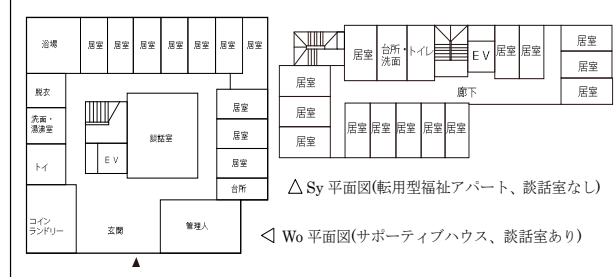


図2 各施設平面図

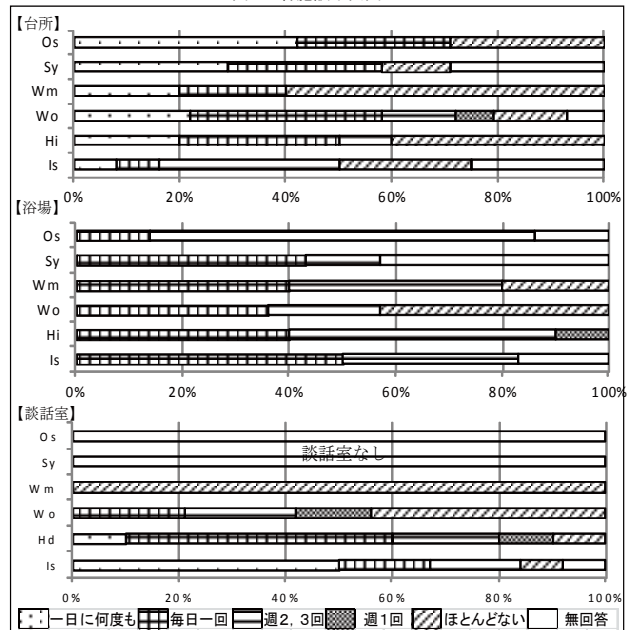


図3 空間に対する利用と評価

用時間に制限がある」「気を使う」といった自由な利用を求める意識が見られた。また、「ほとんど利用しない」の層では、デイサービスや銭湯を利用しており、就労のため時間内に入浴できない居住者もいる。

【談話室】Wmは改修して間もないため「広くてゆったりできる」という意識があるが、積極的利用には至っていない。Wo, Hi, Isでは選択的利用ができる場として機能しており、絶対的利用でないためネガティブな意見は見られず、「話ができ、安否確認の場」として評価されている。

5. 生活実態からみた居住者の分類(図4)

居住者の一日の生活展開と利用頻度から、居室・共用部型、談話室型、外部型に分類し、各空間の有用性を比較した。

【居室・共有部型】食事や休憩は主に居室で行い、食事準備、洗濯、風呂は共用部で行う。曜日や気分に応じて市民館や喫茶店を利用する。また、デイサービスやコインランドリー混雑時、食材の買出しなど必要に応じて外出し、完全に閉じこもる居住者は見られなかった。この分類の居住者は台所を「生活の場」とであると同時に「接する場」として認識しており、浴場でも他の居住者と話をする。また談話室やスタッフの存在にも満足しており、談話室を利用したいときに利用できる「選択的な場」として評価している。

【談話室型】一日の多くを談話室で過ごし、食事も談話室でとることが多い。談話室では新聞を読んだり、他の居住者とオセロや競艇の予想をして過ごす。また、食事は居室で行うが、談話室で本を借りたり、タバコを吸ったりして、長時間の利用ではないが頻繁に利用する居住者もいる。談話室を「交流の場」として捉えており談話室の存在が他の居住者と顔見知りになるきっかけを作り、他の居住者の見守りを行うといった共助に派生している。談話室で支給の弁当や買ってきた食べ物を食べるため台所の積極的利用には至っておらず、「交流の場」としての認識が強い。

【外部型】食事は自炊せずに地域の食堂や喫茶店で食べることが多く、地域に行きつけのお店がある。居室は休憩に利用することが多く、「休む場」としての意識が見られる。自炊をあまりしないため台所の利用は少なく、洗濯、風呂のみ共用部を利用する。談話室は、外出前や合間に弁当を食べたり、新聞を読む、モーニング喫茶の場所であり、外出する際の「中継地点」としての役割が強い。就労している居住者にとっては利用時間が制限されている浴場は利用しにくく、銭湯を利用することがある。

【まとめ】各空間の役割が変化することで、生活スタイルの異なる居住者が共存し、自立した生活を送っている。それを可能にする要因として、一人でも多数でも利用できる談話室や、いつでも利用可能な台所などの「選択的な場」の提供と、個別のニーズに応じ、必要な時に相談できるスタッフの存在が大きい。また、ほとんどの居住者で一人暮

らしにおける他者への意識の高さを確認でき、アパート内外の共有部で行為として実践されている。中でも、モーニング喫茶を利用する割合が高く、他のSHのモーニングをはじめとする居住者も存在し、談話室は利便性や安心感を与えるだけでなく、「交流の場」として機能していることが確認できる。SHには各階共同の台所、外部との中継地点となる談話室などの段階的なハードが備えられていること、他のSHや地域と連携し、個々のニーズに対応したソフト運営の仕組みによって、このような生活が可能となっている

6. 結論

あいりん地区では交流を好み、積極的に談話室や地域資源を利用する居住者、積極的な交流は好まないが居室の狭小性が故に他の居住者と顔を合わせざるを得ない状況が生まれ、他の居住者に対しての意識の向上につながっている居住者がいる。それらの様々な居住者が共存し、自立した生活を送るためには、選択的に利用できるハードと地域資源と個々の生活を支えるソフト面の連携が必要である。

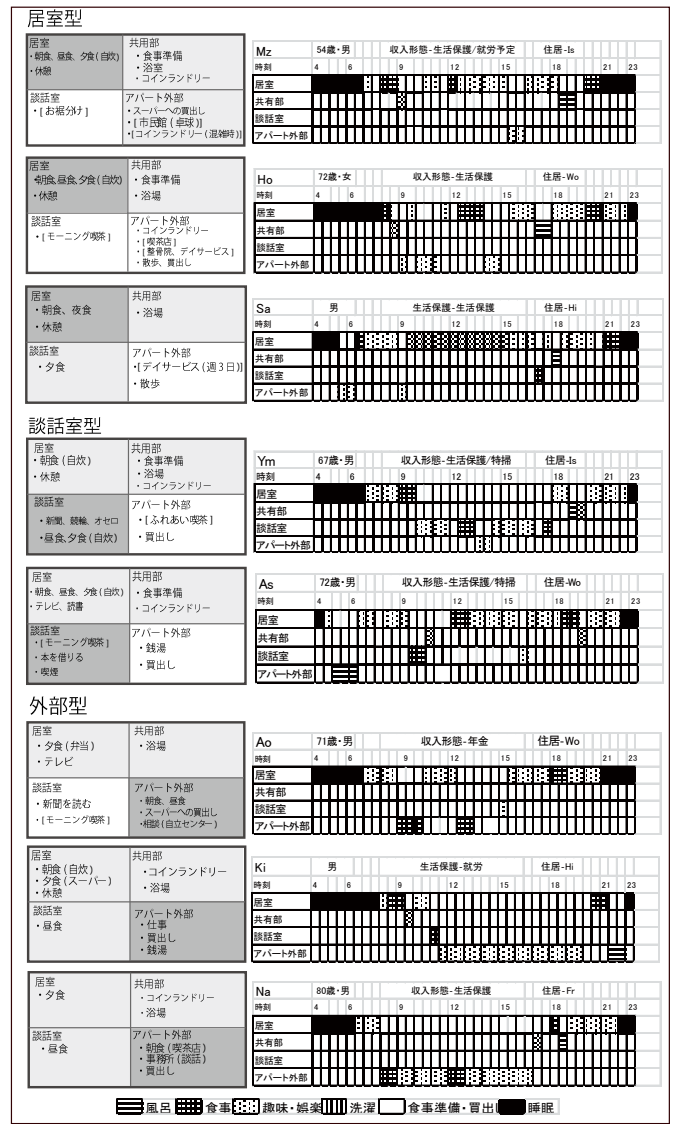


図4 居住者の分類

*大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程
 **大阪市立大学大学院工学研究科 教授・工博
 ***大阪市立大学大学院工学研究科 講師・工博

*MasterCourse, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 **Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng
 ***Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka City University, Lec. Eng